DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
ハイパースーパー北上様様は
みんなの肉便姫♥

ハイパースーパー北上様様は みんなの肉便姫♥

提督～
頼んでたビデオ
届いたみたいですよ♥
おっ！楽しみだな！
早速見てみよう！

「よく来てくれたね！それじゃ早速見て欲しいものがあるんだけど…」

広報部の責任者の男は、いやらしく息を荒げながら北上の肩を掴んで、一枚の写真を差し出した。

そこには唇を寄せ合う提督と大井の姿がはっきりと映し出されていた。

――艦娘と軍の人間の恋愛は、軍規により禁止されている…北上も男も、それはよく知っている。そして北上は二人の関係も以前から知っていた…。

「優しい北上さんは、二人のことをそっとしておいて欲しいよね？それならちょっと僕からお願いがあるんだけど…」

「ったく、なんだろうねえ…めんどくさい」

ぼやく北上が向かっていたのは鎮守府の片隅にある広報部だった。

艦娘たちにとって、そこは滅多に自分から赴く用はないところだ。

提督のお使いか何かだろうか？

彼女はぼんやりとそんなことを考えながら部屋の戸を叩いた

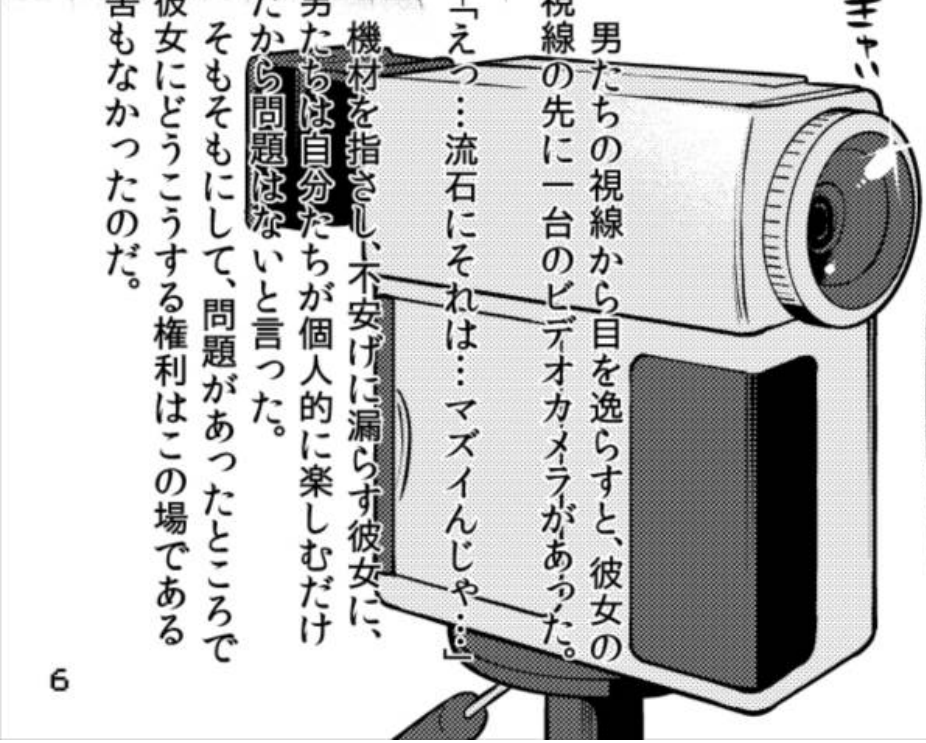
「重雷装巡洋艦北上です、失礼します」

夜になり、北上が通された会議室には脂ぎった男たちが幾人も揃っていた

なんのことはない、大井と提督の秘密のために身体を売れということだ。

「重雷装巡洋艦…北上…です…
今日はよろしく…お願い…します…」

無論、そんなことを彼女は重々承知だ。
自分の貧相な身体で、二人の愛を守ることが叶うなら安いものだ。
扇情的な水着で肢体を男たちの視線に晒しながら、彼女はそう考えていた。



男たちの視線から目を逸らすと、彼女の視線の先に一台のビデオカメラがあった。

「えっ…流石にそれは…マズイんじゃ…」

機材を指さし、不安げに漏らす彼女に、男たちは自分たちが個人的に楽しむだけだから問題はないと言った。

そもそもにして、問題があったところで彼女にどうこうする権利はこの場である筈もなかったのだ。

ビニル製のマットの上、出来る限り無心で北上はそっと脚を広げた。
男の内の一人が好色めいた目をぎらつかせ、恥丘に指を這わせる…既に用意されていた潤滑液を慣れた手つきで水着の内側に丹念に塗りこむと、男は屹立した陰茎を彼女の肛門にねじ込んでいった。
「いきなりおまんこじゃ、情緒ってもんがないからな～」
ぺちっ
固く目を閉じ、息を殺していると彼女の頬にぺちぺちと間抜けな音を立てて別な肉棒が叩きつけられる。
「あんまり黙ってちゃ面白くない北上さんアナル初めてでしょ？おじさん感想とか聞きたいな～」
本来なら答える気にもならないが、今は彼らに反するわけにもいかない。肛門を押し拓かれる違和感に眉根を寄せながら、彼女が口を開こうとする…
ぺち

グいっ
ズズズブブ
ズボ
ずっ
ずちゅっ
んん――
んんん――
びくびくっ
「うっそで～すｗ
そんなの全然興味ありませぇ～ん
みんな北上さんを滅茶苦茶にしたい
だけだからね！艦娘は丈夫だから
ほんとやめられないよ～」
男はそう言いながら、北上の頭を掴み
無理矢理に肉棒を突き立てる。接吻すら
したことのない彼女には当然イラマチオ
の経験などはなく、必死に押し返そうと
抵抗するが、それも男たちを楽しませる
だけだった…。
8

肉棒で喉を押さえつけられ
呼吸とともにか細い悲鳴をあげる――
それが余計に男たちの加虐心を煽る
びゅるるるる
ビクッ
ビクッ
ガチャラ
ずニッ
ずッ
ずッ
ずッ
そして焼けつくような精子が
北上の体内に放たれる――
彼女の知る由もないが、男たちは
薬によって精力を高めているため、
非常識なまでの量の精液を放てる
ようになっている。
ボビュル
ボッ
びくっ
びくっ

生娘である北上に、そんな量の
精液を受け止めることができる筈
もなく、陰茎が喉から引きぬかれて
程なく、胃の中身と共にその殆どを
マットの上にぶちまけてしまう。

粘りついた呼吸音を漏らしながら
伏せる彼女に、周囲の男たちが
更にはやし立てる。

「あ～あ～粗相にはお仕置きが
必要だなあ、罰ゲームだね」

初めての性交を肛門でされた時、もしかして連中は肛門でしかするつもりはないのではないか？等と淡い期待を彼女は持っていたが、欲望に塗れた男たちがそんな真似をするわけがなかった。
むわっ
ごぽっ
どろっ
どちゅ
ブチブチブチ
ズブブブブ
罰ゲームと称して、男の肉棒が彼女の処女を呆気無く貫いた。
「おっ！北上さんはやっぱり処女か～もうけもうけ！マーキングしちゃお！」

なんとなく、本当にただなんとなく
私は少しだけ昔を思い出していた

提督に、私と大井っちの
お気に入りの場所を教えた
少しだけ昔のこと…

大して古いことでもないのに、
なんだか今は遠い昔のようだ…

北上が呆けている間に、男たちは
段々と熱を上げていった…

ずっ
ずっ
ずっ
ずっ

最初に挿入した男が早々に射精すると、
その感触に絶望する暇もなく次々に肉棒
が突き立てられる。
ここに居る男たちは十に満たないほどの
人数だが、彼らがどれほどで満足するか、
それを彼女が知るわけもない…。
びゅるっ

北上の嗚咽を聞きながら、男たちは彼女を犯し続けた。口に、尻穴に、性器に肉棒を突き立てていく…。
ドクッ
びゅるる
びゅるる
その内に北上は大粒の涙を零しながら笑っていた。彼女に被虐性欲は欠片もない。行為の全てはただただ辛い。
男達はそれを見てけらけらと、無邪気に笑っていた…。
あは…
あはは…

「北上さん、僕らが大人にしてあげたんだから
感謝の土下座を最後にして欲しいな～」
下卑た笑みで男のうちの一人が言うと、周囲も
またそれをはやし立てる。
じょろろ
じょろろ
ラ…
力なく彼女は頭を垂れる。
「わっ…私を…大人の女にしてくれて…
あっ…あ…あぅぅ…」
ララッ
男たちは彼女に向かって小便を垂れ流す
それを引き金に、北上は土下座しながら糞を
ひり出していた。男たちはそれを見てまた
笑った。
ゲラ
ゲラゲラ
びくんっ
ブリュ
ブリュリュッ
ぶっぽっ
めーめー
めー
びくびく

…それからも彼女は度々男たちに脅され、その都度犯され続けた。

その胎が膨らみかける頃、彼女は鎮守府から行方を消してしまった。

時折、北上は考えることがあった。もしも自分がもう少し素直だったら…今とは違う道があったのだろうか？

せめて、あの人の顔を忘れないといいな、そんなささやかな願いを胸に秘めながら、彼女は今日も犯されるのだった。

ハイパースーパー北上様様はみんなの肉便姫♥

おわり☆